

国立
国会
図書館

月報

NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2026.4



国立国会図書館ビジョン2026-2030
— 共につくる知の循環 —

あの人の蔵書 布川文庫

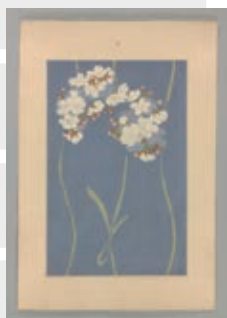
本の森を歩く
明治時代の「わが家のカレー」、そのお味は？

国立 国会 図書館 月報

NO. 780
APRIL 2026

CONTENTS

- | | | | |
|----|---|----|---|
| 1 | 『日本語の法華経』
—忘れられた文学者江南文三と終戦の日の安倍能成—
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から | 29 | 館内スコープ
つながりを強めるために |
| 4 | 国立国会図書館ビジョン2026-2030
—共につくる知の循環— | 30 | 本屋にない本
『愛・地球博回顧録
2005年 日本国際博覧会』 改訂版 |
| 10 | あの人蔵書
第8回 布川文庫 | 31 | NDL Topics |
| 18 | 本の森を歩く
第31回 明治時代の「わが家のカレー」、そのお味は？ | | |



表紙：「染井吉野」
龍澤邦行『名桜選集 桜花二十五種図』第1輯
名桜選集頒布会 1932 25枚
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2542921/1/12>

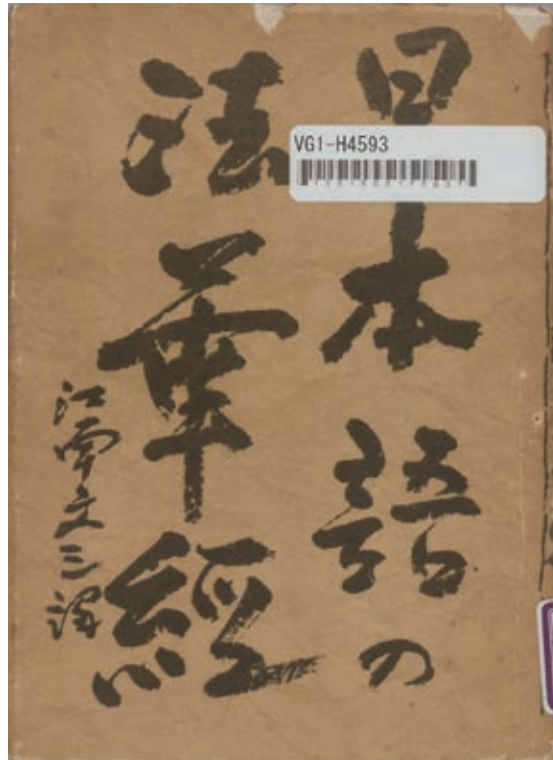
『日本語の法華経』

—忘れられた文学者江南文三と終戦の日の安倍能成—

吉村雄太



江南文三
与謝野鉄幹が設立した詩歌結社「新詩社」の同人として活躍していた頃。
『与謝野晶子』（日本文学アルバム；16）、筑摩書房、1955、p.32
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1336287/1/19>



表紙

『日本語の法華経』

江南文三 著 大成出版 1944 19cm
<VG1-H4593>

今月は出版界で広く活躍した布川角左衛門（1901～1996）が残した出版関係コレクション「布川文庫」（本誌10～17頁参照）から江南文三『日本語の法華経』と、それを読んだ哲学者安倍能成についてご紹介したいと思います。

江南文三（1887～1946）という名前に聞き覚えのない方も多くいらつしやるかもしれません。江南は石川県金沢生まれの文学者です。早熟の詩人として知られ、わずか16歳の時に書いた詩が詩誌『明星』に掲載されています。東京帝国大学に進学してからは、初代編集の石川啄木の後を継いで文芸誌『スバル』の編集者として活躍し、また与謝野晶子との合同歌文集『花』を刊行するなど、才気あふれる若手文学者として明治末期から大正初期の文壇では知られていました。

しかし、江南が大学を卒業して中学教師となるのと時同じくして『スバル』は廃刊。それからほぼ創作活動を行っていません。昭和初期頃には存命中にも関わらず、すでに忘れられた存在になっていたようで、芥川龍之介が江南のその才能を認めながら、次のように書いています。

僕は僕の先輩や知人に二三の好短編を書きながら、しかもいつか忘れられた何人かの人々を数えている。（中略）江南文三等の



表見返し及び遊び紙

装幀は津田青楓によるものです。江南文三から安倍能成への献辞が書かれています。戦中のため、西暦ではなく皇紀で「二千六百五年七月」とかかれています。

諸氏にもこう云う歎を感じている。⁽¹⁾

そんな江南が長い沈黙を破って晩年に刊行した唯一の単著は文学作品ではありませんでした。『日本語の法華経』と題された同書は法華経を日本語訳したもので、第二次世界大戦真っ只中の昭和19（1944）年に刊行されました。「この本を書いたわけ」という自序には以下のように記されています。

あくまでも明るい朗らかな日本國を一刻も早く作り出して頂きたいと思つて、江南がそれを誰にもわかる日本語に直したのです。

当時出版されていた法華経の日本語訳は専門性の高いものが多く、一般向けのやさしい口語で書かれたものはありませんでした。法華経には世界を平和にする真理が書かれていると考えていた江南は、戦時中という困難な時代にこそ、できるだけ多くの人に法華経が読まれるべきだと考えていたようです。また同時期に江南は母を亡くしています。僧侶でも仏教学者でもない江南が法華経の口語訳を行ったのは、世界平和を望む心と母への追悼の心からだと考えられます。

同書は戦後も新訂版が刊行されるなど広く出版されましたが、布川文庫に所蔵されている資料は初版であり安倍能成へ献本されたものであるという点で貴重です。⁽²⁾ 安倍能成はカントやスピノザの研究などで知られた哲学者

です。もともと夏目漱石の門下生で文芸批評も行っており、若き江南が『スバル』に投稿した小説を批評したこともありました。⁽³⁾ そのような文壇上の繋がりから、江南が安倍に献本したのでしょう。表紙裏の見返しと遊び紙には献辞が書かれています。

兵火をまぬがかり辛うじて伯林陥落の日ニ出来上りましたこれを 二千六百五年七月

文三合掌 お世話二なつた安倍能成様ニ 献辞からは当時の緊迫した状況が伝わってきます。中身を見ると、安倍による傍線や書き込みが残されており、安倍が終戦前後の7月19日から8月19日にかけて同書を読んでいったことが窺えます。

終戦の日には「八、一五夕 講和大詔本十二時」と書かれています。当時第一高等学校の校長だった安倍は、学校で玉音放送を聞き、生徒や職員に訓示を出していたようです。⁽⁴⁾ 夕刻になって『日本語の法華経』を読んだ安倍は一体何を思ったのでしょうか。その二か月後、第一高等学校の校長として安倍が寄稿した文章にはこんな一節があります。

日本人は今後平和をほんとうに愛好し、(中略)ほんとうに世界人類の歡びとなり、世界の國々から感謝されるやうな国民とならねばならぬ。諸君は何れの國民も未だかつて十分には遂げ得なかつたこの偉大な理想

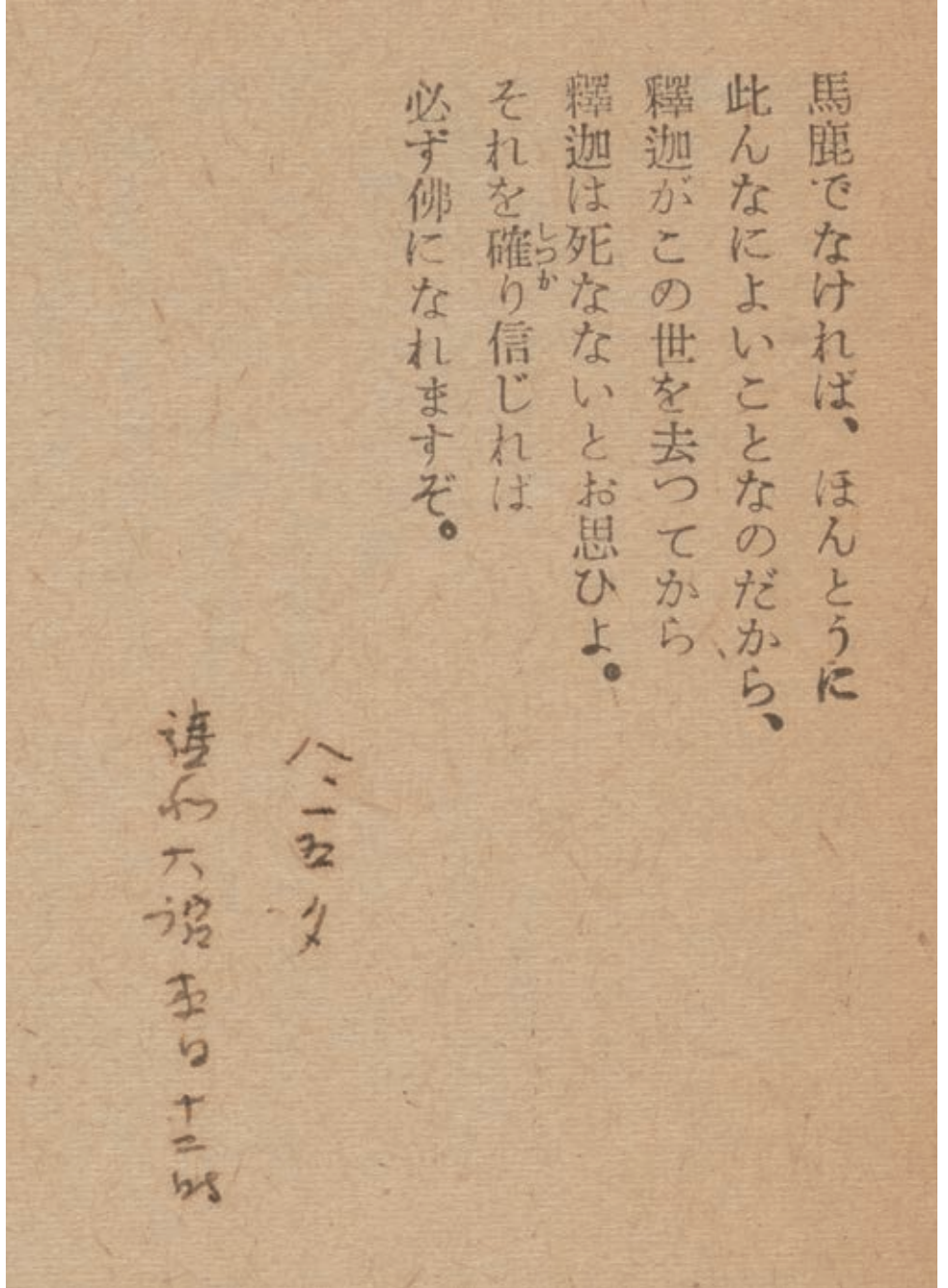


安倍能成
明虹倶楽部 編『文化人のプロフィール』富士
写真フィルム, 1950, p.165 (堀不佐夫 撮影)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/3026570/1/183>



江南文三と謝野晶子の合同歌集『花』の表紙。
江南文三が古今東西の花にまつわる神話や伝説、
故事や慣用語について解説を書き、それらの花
について謝野晶子が短歌を詠んでいます。

江南文三, 謝野晶子『花』誠文館, 1910
<https://dl.ndl.go.jp/pid/902043> (モノクロ)



左下の部分が安倍能成による書き込みです。「八、一五夕 講和大詔本日十二時」と書かれているように読めます。(p.248)
昭和20年8月15日12時は、玉音放送が放送された時間です。

- 『芥川竜之介全集』7 (ちくま文庫) 筑摩書房, 1989, p.324 <KH43-20>
- 布川文庫には布川が私淑した人物の旧蔵書が含まれており、『日本語の法華経』もそのような資料の内の一冊になります。
- 安倍能成「二月の小説」『ホトトギス』14(7), 1911.3, p.66
<https://dl.ndl.go.jp/pid/7972294/1/39>
江南の「手紙」という小説の批評を行っています。
- 安倍能成『戦後の自叙伝』新潮社, 1959, p.11 <289.1-A179s>
- 安倍能成「年少學徒に告ぐ」『蛭雪時代』15(7), 1945.10, p.8 <Z24-67>

○参考文献

- 江南文三『昴誌消息』日本文学館, 2003 <KG314-H6>
川副国基『江南文三』日本近代文学館 編『日本近代文学大事典』
第1巻(人名あーけ) 講談社, 1977, p.231
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12450421/1/124>
『『スバル』と共に消えた俊才 江南文三 明治20年～昭和21年(1880～1946)』『室生犀星研究』22, 2001.5, pp.3340-3346 <Z13-4099>

※<>内は当館請求記号

を辿っていただければ幸いです。

をめぐって、雨がふっても火がふつても、
明らかな明るい心持ちで進んでもらいた
い。切に諸君の健康を祈る。⁽⁵⁾
奇しくも『日本語の法華経』の自序と響き
合う一節です。

終戦の翌年、昭和21年2月8日に江南は亡
くなりました。一方、安倍は同年に文部大臣
に就任、その後、教育行政や平和運動に尽力
します。もしかすると江南の『日本語の法華
経』はそうした戦後の安倍の活動に影響を与
えた一冊だったのかもしれない。

布川文庫をはじめとしたコレクションに
は、旧蔵者の書き込みや資料の来歴が残され
ていることがあります。当館の資料をご利用
頂き、ぜひそこに残された資料と人々の歴史

国立国会図書館ビジョン 2026-2030

— 共につくる知の循環 —

2026年4月から始まる国立国会図書館の新しいビジョンについてご紹介します。

新ビジョン策定にあたって

国立国会図書館長

倉田 敬子



国立国会図書館は、知の基盤の構築と、その基盤へのアクセスの拡大を通じた社会活動の活性化を基本的な役割としてきました。今回のビジョンもその方向性に大きな違いはありませんが、従来と比較すると焦点が異なっています。前ビジョンは知の基盤の「デジタルシフト」を大きな目標としたのに対し、今回のビジョンは、「デジタルシフト」を前提とした上で、「共に」知の基盤を構築し、知の再生産という「循環」をいかに作り上げるか、この「共に」と「循環」に焦点を当てています。

一般に図書館界でのナショナル・コレク

ションとは、国立図書館がその蔵書として構築するものとされてきました。しかし今回のビジョンでは、ナショナル・コレクションを「共に」つくることを謳っています。当館もこれまで国内で発行された出版物を網羅的に収集し、その所蔵資料に基づき「全国書誌」を作成することを役割の一つとしてきました。しかし実際に紙で発行されてきた全ての官公庁資料、民間出版物を当館が所蔵できているわけではありません。さらに、現在電子書籍・電子雑誌として流通する資料のかなり部分は、当館ではなく他の機関リポジトリやアーカイブに所蔵されており、今後も当館

で保管しないデジタル資料は増加していくと
考えられます。その中で当館は、国の全ての
蔵書という意味でのナショナル・コレクション
を他機関との協力の下で構築することを目
標とします。これまで注力してきた当館所蔵
資料のデジタル化を今後も拡大しこれを核と
しながら、他の図書館、研究機関で所蔵・保
管されている資料もデジタルのネットワー
クとしてつなぎ、統合的な検索手段を提供す
ると同時に、その全文に対して何らかのアクセ
スを保証することを目指したいと思えます。

そのためには、現在の紙の所蔵資料を基本
とする収集・書誌作成のあり方を見直し、紙
とデジタル資料を統合的に扱える体制を構築
し、他機関作成のメタデータも活用した真の
「全国書誌」の作成と提供が必要です。さら
に紙の資料、デジタル化資料、電子雑誌・電
子書籍、インターネット資料（ウェブサイ
ト）をシームレスに、また他機関のメタデータも
含めて統合的に検索できるシステムをより使
いやすくしていく必要があります。生成AI
やSNSで情報を検索することが当たり前と
なっている利用者には、伝統的な図書館目録の
探し方を要求するのではなく、当館がこれま
で培った探索のノウハウを生成AI等の新し
い技術に活かせるような高度な検索システム

の研究開発も進めていくべきと考えます。

このようにして構築した知の基盤の利用を
通じて、次の知的生産活動につなげていくの
が「循環」です。利用者の多様なニーズに応
えて、資料の発見可能性を高め、それらを確
実に提供することが、知の基盤の利用の基本
です。その際に、資料を利用することが次の
知的生産活動につながるように、利用者層や
利用目的に応じた適切なサービスを考えてい
く必要があります。たとえば、以下のような
サービスが想定されます。国会議員からの依
頼調査において文献の収集・まとめにとどま
らないより高度な分析を提供すること、来館
せずともより多くの方々が便利に資料を利用
できるようにすること、東京本館と関西館の
来館利用が原則認められていない若い世代に
も他の図書館との連携協力により当館の資料
を利用してもらう方策を考えること、読書に
障害がある方々がより容易に適切なフォー
マットで資料を利用できるようにすることな
どです。これらのサービスは、本や論文をそ
のままの材料として提供するだけでなく、特
定目的での利用や加工を容易にするための
サービスの提供といえます。さらに、専門的
な知識やスキルがなくても当館の資料を容易
に加工したり、分析したりできるようにソフ

トやアプリの提供なども考えられます。

知の基盤の構築にも、知の循環を促進する
サービスの提供に関しても、生成AIをはじ
めとする情報技術を生かした業務体制の根本
的な変革は欠かせません。目標とするサービ
スや活動を館全体としてスムーズに実施する
ためには、できる限り紙に依存しない業務の
デジタル化がまず必要ですし、現在の業務を
データとして把握し効率化を図ると共に、生
成AI等の新しい情報技術を図書館活動に生
かすための研究開発を推進する必要があります
です。組織の内部体制についてもあえてビジョ
ンの重点事業の一つとしたのは、このような
体制を整えることが、ビジョンで掲げた知の
基盤の構築と知の循環を活性化するサービス
を推進するために必須であると考えたからで
す。

今回のビジョンの策定に当たっては、5年
間でできることを考える前に、将来を見据え
た方向性を議論するよう、検討会議のメン
バーに提案しました。ビジョンで示した大き
な方向性に関しては館内で意識を共有しつ
つ、これからの実施段階では多様な意見を議
論しながら、重点事業を前に進めていけれ
ばと考えています。

国立国会図書館は、国会活動の補佐を始めとする国立国会図書館法に定められた使命・目的を、この激変する情報流通環境の中においても変わらずに果たすため、「国立国会図書館ビジョン2026-2030—共につくる知の循環—」を定めます。

このビジョンに掲げる「知の循環」とは、知識・情報の集合体である「ナショナル・コレクション」が国会活動、知的活動、その他様々な活動のために活用され、その結果生み出される知的生産物が更にコレクションを発展させていく一連の循環です。「ナショナル・コレクション」が、世界的・普遍的な情報アクセスの一翼を担い、その役割を果たすために、コレクションを構成する情報は情報流通環境に対応して変わらなければなりません。

国立国会図書館は、これまで専ら自館において構築してきた「ナショナル・コレクション」を、情報流通環境の変化に適応させていくとともに、関係機関と連携して拡充することを目指します。また、「ナショナル・コレクション」を基盤として、知的資源を利用し、生産し、又は管理する全ての人々と共に「知の循環」をつくることを目指します。このために、令和8年度からの5年間で以下の事業を重点的に実施します。

「国立国会図書館ビジョン2026-2030—共につくる知の循環—」より



5つの重点事業

1 ネットワークとしての「ナショナル・コレクション」を築く

インターネット資料及びオンライン資料の収集制度による収集対象の拡大を図るとともに、様々な機関との連携協力を組み合わせることによって、分担保存と統合的アクセスを基本原理とする「ナショナル・コレクション」を構築することを目指します。また、紙等の有体資料と無体資料（電子書籍・電子雑誌）の収集・組織化を統合・一元化する方向を目指します。

◆重点実施事項

- (1) デジタル情報資源の収集強化
- (2) 国全体としてのデジタル情報資源の保存とアクセスの担保
- (3) 紙と電子（有体資料と無体資料）の収集・組織化の一元化

2 デジタルで知へのアクセスをひらく

資料のデジタル化の推進、読書バリアフリーの視点を組み込んだ資料・サービスの整備により、知の基盤をデジタルへ統合し、より多くの情報資源に誰でもアクセスできる環境を作ることを目指します。

◆重点実施事項

- (1) 所蔵資料のデジタル化、全文テキスト化及び所蔵デジタル資料のマイグレーションの推進
- (2) 知へのアクセスの保障を実現するための読書バリアフリーの推進

3 国会の活動を確かな根拠で支える

国立国会図書館の第一義的任務である国会サービスを着実に実施し、国会議員の活動や国政審議を十全に補佐します。国立国会図書館の有する資源と先進的な情報技術を活用し、調査サービスを一層高度化します。さらに、外部機関との連携により、調査サービスを充実させます。また、国会発生情報へのアクセスを整備するとともに、国政課題に関する調査研究の成果について広く国民の利用促進を図ります。

◆重点実施事項

- (1) 国会サービスの着実な実施と高度化
- (2) 外部機関との連携の強化による調査サービスの充実
- (3) 国会発生情報へのアクセス整備と調査及び立法考査局刊行物の利用促進

4 情報技術を活用したサービスで知の創造に貢献する

情報技術を活用した、遠隔サービスの利用拡大及び図書館ネットワークの発展により、広域サービスを確立するとともに、人がAIと共に知の創造を行う時代に向けた情報探索サービスを構築することを目指します。また、以上のようなサービス環境に対応した来館サービスを提供することを目指します。

◆重点実施事項

- (1) 遠隔サービスの利活用の促進と図書館ネットワークの拡充
- (2) 情報探索環境及び情報探索支援コンテンツの充実
- (3) 調査研究を支え、知との出会いの場となる来館サービスの実施

5 知の循環を支える組織をつくる

生成AIを始めとする先進的な情報技術の新規業務・サービスの開発や業務プロセスの見直し等への活用に向けた環境整備を進めます。また、時代の変化に適応した人材育成を行うとともに、組織編成や資源配分の枠組みの見直しを行うこと等により、課題に取り組む体制を整備します。

◆重点実施事項

- (1) 生成AI等の先進的な情報技術の活用・開発に向けた環境整備
- (2) 時代の変化に適応した人材育成、専門人材等の確保
- (3) 課題に取り組むための組織編成と資源配分

国立国会図書館ビジョン 2026-2030 の検討は、館長を委員長とした検討会議と、その下に置かれた 4 つの各検討部会で行われました。また、検討に当たっては、外部有識者からも幅広く意見を伺いました。ここでは、各検討部会で特に課題だと捉えたポイントやビジョン期間の取組の方向性について、部会長の考えをお伝えします。

デジタル資料の収集とアクセス検討部会

国立図書館の任務は、そのままでは散逸してしまう、国内の出版物を網羅的に収集・保存し、組織化することにより、国民の誰もが利用できる、国民共有の文化的財産である出版物のナショナル・コレクションを構築することです。それは、国の蔵書であり、社会の記憶とも表現できるでしょう。これを制度的に担保するのが納本制度です。また、納本制度により収集した国内出版物の目録である全国書誌です。全国書誌は我が国の出版の記録です。

近年、デジタル技術の進展により出版の形は大きく変容し、多様で膨大な量のデジタル資料が作成されるようになりました。これを受け、デジタル資料の収集・保存は、国内の関係機関と役割を分担する制度になっています。新しいビジョンでは、この方向性を更に深化・発展させ、分散保存される多様なデジタル資料の統合検索と一元的な利用、そして持続的なアクセスを保証する仕組みを国立国会図書館が核となって整備することによって、関係機関と連携協力してナショナル・コレクションを築くことを目指したいと考えました。

また、新しいビジョンでは、紙等の蔵書のデジタル化を引き続き推進し、知の基盤をデジタルへ統合することを掲げました。デジタル化することで、全国どこからでもナショナル・コレクションを利用できるようになり、真の意味で国民共有の財産となります。それは我が国の文化、そして社会をより豊かにする創造の源泉となるでしょう。



部会長・竹内秀樹（収集書誌部長）

国会サービスの在り方検討部会

当部会では、国会に対するサービス（以下「国会サービス」）の在り方について検討しました。国会サービスは、当館の第一義的任務であり、調査及び立法考査局（以下「調査局」）を中心に、専門的知見に基づく調査や、当館蔵書及び各種情報源に基づく情報提供を行っています。これにより、当館は国会の活動を補佐するという重要な役割を担っています。具体的には、国会議員からの依頼に基づく調査と、国政課題に関する調査研究（論文等の執筆）を行うとともに、国会会議録検索システム（衆議院・参議院の事務局との共同事業）を始めとする国会発生情報の提供を行っています。

認識した課題としては、①近年の情報流通環境における国会サービスの在り方、②調査の高度化と業務合理化、③国会発生情報へのアクセス整備と調査局刊行物に対する国民の認知度向上といった点が挙げられます。①については、様々な情報が世を流通する中で、確かな根拠に基づく調査・情報提供を丁寧に行うという取組を、今後も着実に実施する必要があります。②については、人材育成や外部との連携により高度な調査への対応力を高めるとともに、生成 AI を始めとする先進的な情報技術の活用による業務合理化が必要です。③については、国会と国民とをつなぐ当館の役割も踏まえて、国会発生情報へのアクセス整備や調査局刊行物の利用促進を図ります。

以上を踏まえ、今後も引き続き十全な国会サービスをご提供するよう努めてまいります。



部会長・松浦茂（総務部長 [前・調査及び立法考査局長]）

利用者サービスの在り方検討部会

当部会では、当館の利用者サービスの対象や目指すサービスの在り方について議論を行いました。理想としては、国内全域、また海外の日本に関心のある方まで含め、当館や国内外の様々な機関が持つ情報へのアクセスを担保する必要があるのですが、当館施設（東京本館、関西館、国際子ども図書館）の近隣の方と遠方の方では、当館を活用した情報へのアクセスの容易さに関して、差が生じてしまっているのが現状です。その差を完全に無くすことは難しいとしても、減らすために我々がすべきことは何かを考えました。同様に、読書に関する障害によって生じている差についても検討しました。

結論としては、まず、インターネットを通じて利用提供が可能な資料・情報については、デジタル技術の活用をさらに進めて利便性を高めることを目指します。しかし、それだけではまだ、アクセスできない情報も大量にありますので、各種図書館を中心とした関係機関との協力ネットワークを発展させることで、地域や障害による差を減らしていくことも、並行して目指します。関係機関との協力にあたっては、組織や蔵書の大小もあり、まったく同一の立場とはいかないにしても、相互に得意な領域で協力し合える関係を構築できればと考えています。

一方で、東京本館を中心に、コロナ禍終息以降、来館者の増加が続いており、混雑時には快適な利用環境とは言い難い状態となることもあります。一部資料への利用の集中などにより資料保存上の課題も生じています。こうした各施設内のサービスにおける課題への対応も進めていきます。



部会長・大場利康（利用者サービス部長）

活動を支えるリソース、組織、施設検討部会

当部会では、新ビジョンを実現させるための組織としての対応、つまり、人員や予算などのリソースをどうするか、組織機構の整備再編が必要かなどについて検討しました。

当然、他の部会の検討対象であった各サービス・事業の新たな展開に深く関わるわけですが、現実問題として、ヒト・カネといった資源が必要あるいは要望に応じて容易に拡大するのは考えにくいので、先進技術を活用した効率化が必須になると考えました。館の主要事業や、実は館業務中のかなりの比率を占めている官房的業務の実効性ある効率化のためには、機動性が必要で、機密情報も扱う必要があります。そのためには、既存の外部サービス等を導入するのではならず、自前のシステム（仕組みという意味を含めて）がいるのではないかと思います。プロトタイプで個別の課題に取り組むところから始めて、育っていくとよいと願っています。

そのため人材が極めて重要なのは言うまでもありませんが、これに限らず、技術の進展が社会の在り方を変えていく時代にあって、今以上に職員がその能力を発揮することが肝要です。安心して能力を広げていけるような環境整備や能力開発機会の拡充に努めるとともに、他機関との連携や外部専門家の協力も得て、変動の時代を乗り越えていければと思います。



部会長・木藤淳子（副館長〔前・総務部長〕）

あの人蔵書

布川文庫

増田玲

布川文庫とは

布川文庫は、布川角左衛門（1901～1996）が収集した出版関係資料を中心としたコレクションです。出版社の社史をはじめとして、編集校正、装丁、印刷に関する研究書やテキスト、出版流通、著作権、図書館に関する資料、さらに雑誌の創刊号やベストセラー本に至るまで多種多様な資料が含まれ、その数、約25、100点に上ります。

本年は布川角左衛門の没後30年にあたります。本稿では、布川氏の携わった仕事や交流関係と紐付けながら、出版関係の図書を中心に布川文庫のさまざまな資料を紹介します。

布川角左衛門について

布川は明治34（1901）年、新潟県長岡に生まれました。大正10（1921）年、政法大学に入学し、倫理学の講義を担当していた安倍能成の紹介により、在学中に岩波書店でアルバイトを始め、昭和3（1928）年、同編集部に入社します。以降、編集者として数々の書籍の編集にあたりました。『岩波哲学小辞典』（昭和5年刊）、『岩波西洋人名辞典』（昭和7年刊）のほか、西田幾多郎、波多野精一、野上豊一郎、三木清、田辺元、斎藤茂吉らの書籍の編集などに携わり、編集の仕事を通じて、さまざまな人との交流を深めました。

昭和31年、岩波書店を定年退職した後は、日本の出版史の研究及び研究体制の整備に力を入れ、日本書籍出版協会10周年記念事業『日本出版百年史年表』の編纂や日本出版学会



布川角左衛門

出典：『文庫本編集長告知版』『アサヒグラフ』1433号、1952.1.30, p. 22

の創設に携わったほか、栗田出版販売代表取締役社長、国立国会図書館の納入出版物代償金審議会会長、文部省著作権審議会委員等、さまざまな役割につきましました。また、大学などにおいて、出版史や編集業務についての講義を行いました。平成8（1996）年に亡くなるまで日本の出版界を支える業績を残しており、出版関係資料の収集もその一つに数えられます。



布川文庫の来歴

布川は戦前から本を集めることに興味とていましたが、昭和20年3月の東京大空襲によりそれらの蔵書すべてを失ってしまいました。蔵書を失った経験から終戦後は一時、本の蒐集をやめていたものの、小日向台（東京都文京区）に自宅を購入して生活が落ち着いた頃から、次第に自身の業務に関する文献を集めるようになります。そして、集書は『岩波書店五十年』や『日本出版百年史年表』（以下、『年表』といいます）の編纂に従事することで加速しました。布川は『国立国会図書館月報』で、当時のことを以下のように回想しています。

願れば、私が私の職域に密接する多くの出版関係の資料類が歳月の経過とともに、とかく散佚し、散在されてしまいがちなことを懸念し、同時に自分自身の勉強のためにも考え、それらの収集・保存をし出したのは、もはや三〇年ほど以前である。特に、それらを利用した

いと思っても容易にできない実際を切実に体験した初めは、昭和

三八年八月、岩波書店が創業五〇年に当たって発行した『岩波書店五十年』（三八年一月発行）の編集の一部を担当したときであった。それに引続いては、昭和四一年二月に日本書籍出版協会が創立一〇周年の記念事業として企画した『日本出版百年史年表』（四三年一〇月完成）の編纂に専念した時期であった。（中略）この二年八か月を費した『年表』の編纂が終わったとき、副産物のように私の所有として残ったのは、かなりの量になった参考文献や資料類であった。（布川角左衛門「布川文庫」の始末記『国立国会図書館月報』324号、1988年3月、22頁、Z21-146）
（傍線部、太字は執筆者による）

布川は『年表』完成後に手元に残った大量の本を前に、やがて、これらの本を基にして出版研究を行う人々が自由に資料を利用できる「出版資料館」のような施設が作れないだろ

うかと考えるようになります。そのような思いもあり、『年表』完成後も布川は出版関係資料の収集を継続していました。

分量が増えていき自宅での維持管理が困難になってきたところ、栗田書店がビルの一室を提供してくれることになりましたが、資料を移送すると、ますます資料収集に拍車がかかりました。しかし、ビルの改築計画が持ち上がり、再度の資料の移転を迫られることになりました。そのとき、国立国会図書館支部上野図書館に仮寄託することが決まりました。仮寄託を経て昭和62年及び平成3年に正式に寄託され、没後、平成10年に降に順次寄贈の手続きが進められました。そして平成16年3月に当館の特別コレクションとなり、6月に一般公開されました。

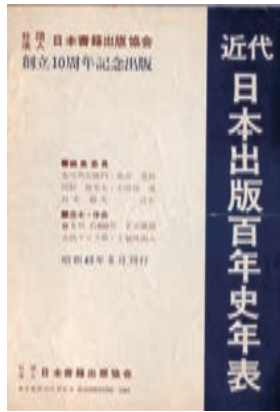
現在、布川文庫の資料の大部分を東京本館人文総合情報室で提供していますが、幕末・明治初期までの資料のうち、和装本や当館で準貴重書に指定している資料は東京本館古典籍資料室で提供しています。また、アジア言語資料（中国語・朝鮮語を

除く）は関西館アジア情報室で提供しています。

資料の検索や閲覧方法の詳細について、詳細はリサーチ・ナビ「布川文庫」(https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/humanities/post_100040)をご覧ください。

<>内は当館請求記号です。なお、請求記号が「VG1」（布川文庫）から始まる資料の一部は、NDLサーチでは検索できません。

『日本出版百年史年表』 編集関係資料

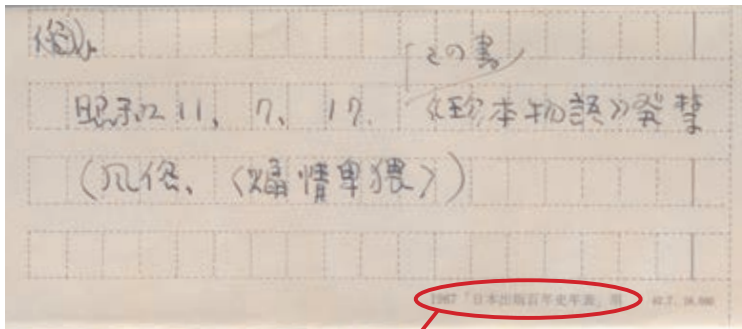


左：『日本出版百年史年表』日本書籍出版協会，1968 <VG1-H493>
他の資料とともに書庫内に排架されています。

右：組見本や刊行のことばなどを含むパンフレット。「昭和43年5月刊行」とあります。

『日本出版百年史年表』は、明治元年から昭和42年に至るまでの近代日本の100年間の出版史をまとめた年表です。社団法人日本書籍出版協会創立満10周年記念出版事業として編纂され、布川が編集委員長を務めました。

『年表』作成を行う中で、布川が直面したのは出版関係の資料の不足でした。

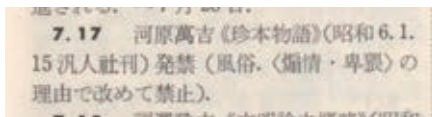


1967「日本出版百年史年表」用

河原萬吉『珍本物語』汎人社，1931 <VG1-H7>に挟まっていた「1967『日本出版百年史年表』用」と印字された原稿用紙

布川によるものと思われる字で「昭和11.7.17 この書『珍本物語』発禁(風俗、<煽情卑猥>)」と書かれています。

なお、原稿用紙に「1967」とあることから、『年表』は昭和42年の刊行を目指していたことがうかがえます。当初の刊行は昭和42年4月を予定していたようです(『業界ジャーナル 出版百年史編纂 書協の十周年事業案』『出版ニュース』675号，1965.11, p.36 <Z21-164>)。実際の刊行は昭和43年10月です。



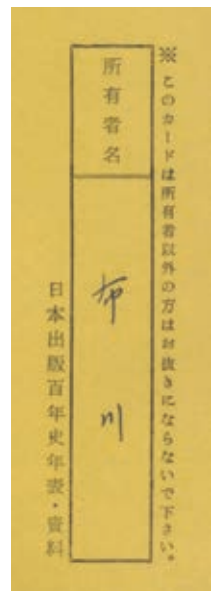
『日本出版百年史年表』で『珍本物語』について言及している箇所(p.535、昭和11年の記載があるページ)「7.17 河原萬吉『珍本物語』(昭和6.1.15 汎人社刊)発禁(風俗、<煽情・卑猥>)の理由で改めて禁止。」という記載があります。



『創業五十周年を迎えて』講談社，1959 <VG1-H1038>

明治42年創業の講談社が、社史『講談社の歩んだ五十年』講談社，1959 <VG1-H365>とは別に作成した24ページの小冊子です。第3代社長の野間省一による挨拶のほか、藤原銀次郎、吉川英治、大野孫平の3名からのお祝いの言葉と、講談社の沿革が収録されています。

廃業した明治時代の出版社の創業年が分からない、出版物の刊行年や出版人の生没年がはっきりしないとといった問題を可能な限り解決すべく、現存する出版社へアンケート調査を行ったほか、資料集めに奔走しました。布川文庫には、そうした布川の努力の跡を見ることができます。

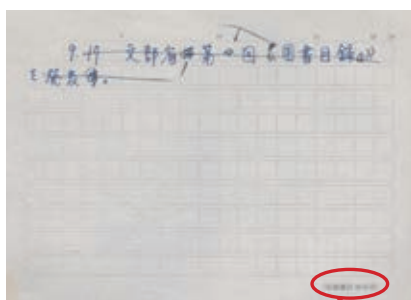


同書に挟まっていた紙片紙片には「日本出版百年史年表・資料」と印字されており、この資料は『年表』編纂に際して参考にされたものだと考えられます。

『岩波書店五十年』編集関係資料



劉国鈞 著，松見弘道 訳『図書の歴史と中国』理想社，1963
<VG1-H199>



(岩波書店 50年用)

同書に挟まっていた「岩波書店 50 年用」と印字された原稿用紙

原稿用紙には「9.17 文部省第 1 回<図書目録>を発表す。」と書かれ、その上から取り消し線が引かれています。『岩波書店五十年』にこのメモと全く同じ記載を見つけたことはできませんが、1959 年 9 月 7 日の「文部省，図書選定制度を図書目録制度に改める省令（青少年の読書指導のための資料の作製等に関する規定）を公布し，図書目録第 1 集案を発表。（11 日，日本書籍出版協会，抜打ち配布を不満とし，目録無断登載の拒否を申入れる）」という項目及び同年 9 月 30 日の「文部省，<青少年向図書目録>第 1 集を発行，公民館・公共図書館などに頒布。」という項目があり、これらに関連するメモだと思われます。

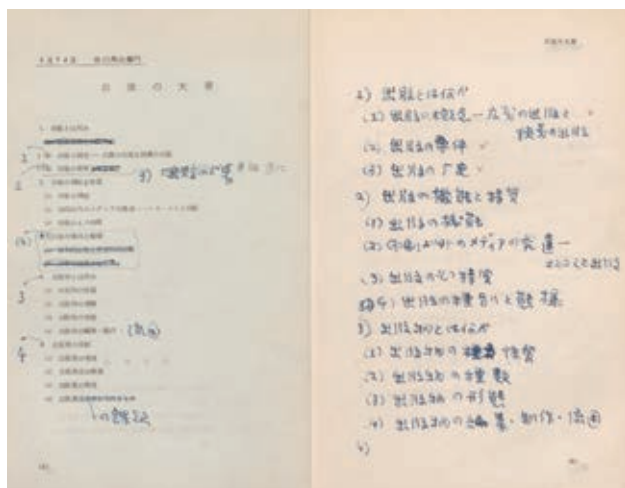
なお、実際に文部省によって「図書目録」（『青少年向図書目録』1，[文部省社会教育局]，1959 <UP49-H10>）が刊行されたのは昭和 34 年 9 月 18 日のようです。（「『図書目録』拒む」『朝日新聞』1959 年 9 月 19 日朝刊（東京）p.10）

『岩波書店五十年』は、岩波書店創業 50 周年を記念して昭和 38 年に刊行された資料です。岩波書店の刊行図書目録に「岩波書店」、「出版界」、「内外事情」の 3 種類の年表が付いています。すでに布川は岩波書店を定年退職していましたが、社友として「出版界」の年表作成を担当しました。布川文庫の図書の中から、この『岩波書店五十年』執筆のために使われたと考えられるメモが見つかります。

テキスト類

布川は出版教育にも深く関心を寄せていました。1950 年代から徐々に大学で講義を行うようになり、初期は編集に関する実務的な講義が中心でしたが、次第に出版論、出版史といった内容の講義に重心が移ってきました。また、1960 年代以降は、日本エディタースクールでの講師や文部省認定の社会通信教育講座の講師といった社会人教育にも携わりました。

日本エディタースクールの講義ノートや社会通信教育講座『編集・制作講座』・『校正実務講座』のテキストなど、布川が携わった出版教育に関するテキスト類が布川文庫に残されています。



『普通科講義ノート 昭和 41 年度春期』日本エディタースクール，[1966]
<VG1-H2490>

日本エディタースクールの、夜間部普通科（3 か月）の講義ノートです。布川が講義を担当した「出版の概要」に書込みが見られます。



出版社史

出版社の社史に限らず社史類は基本的に発行部数が少なく、非売品として関係者へのみ配布されるというケースが主流です。布川は出版業界に長く身を置いていたため、出版社や関連業界の社史を比較的入手しやすい環境にあったと思われます。実際に、布川文庫には当館に納本されていない出版社史もあります。出版社史のほか、関連業界である取次・書店や印刷会社、製紙会社などの社史も含まれています。

また、出版社史をテーマに、布川は昭和43年に鈴木敏夫（読売新聞社図書編集部長（当時））と対談を行っており、そこで出版社史を作ること

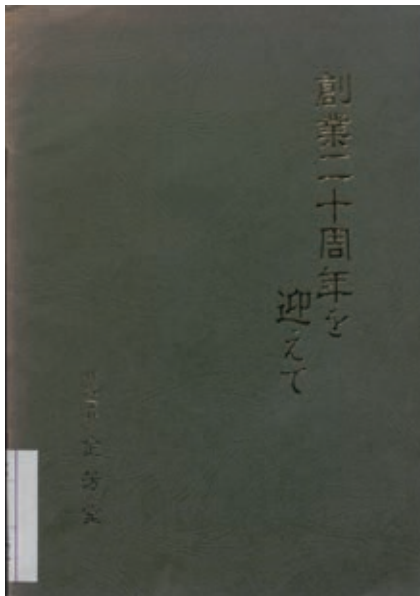
の重要性を説いています。

とにかく、薄いものでもいいから、十年たったら社史をおつくりなさいと言いたい。（中略）
出版社の歴史は、日本文化の歴史に、非常に重要な意味をもっている。だから、各出版社個々の消息以上の意味を持っていることを、社史の値打ちに加えるべきだと思います。

〔対談〕明治百年記念特集（22）
出版社史』『新刊展望』12巻20号
1968年10月、10～11頁
A Z
21-181V

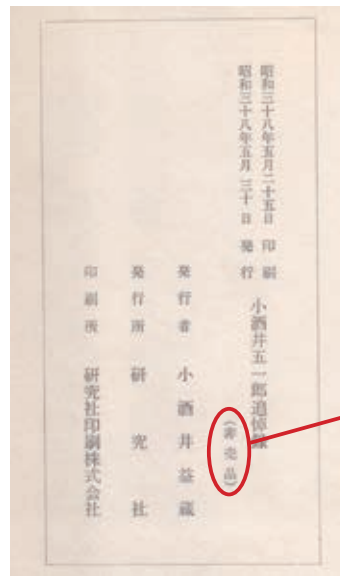
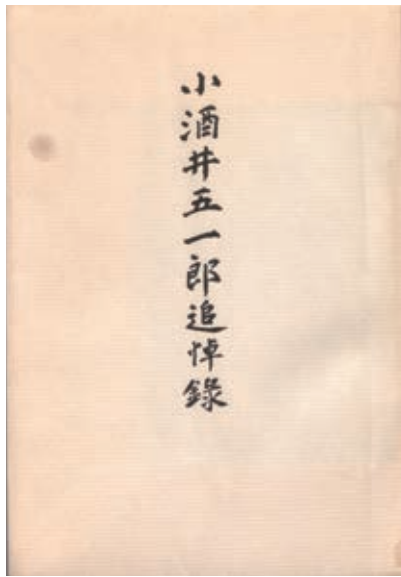


三省堂部課長懇話会〔編〕『三省堂の戦後出版小史』三省堂部課長懇話会、1973
<VG1-H5632>
三省堂部課長懇話会 10周年を記念して昭和48年に発行された冊子です。奥付に非売品とあります。



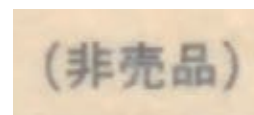
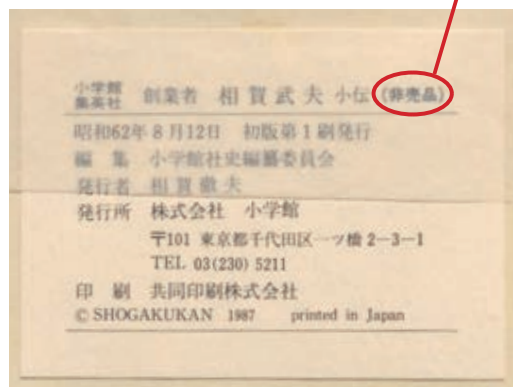
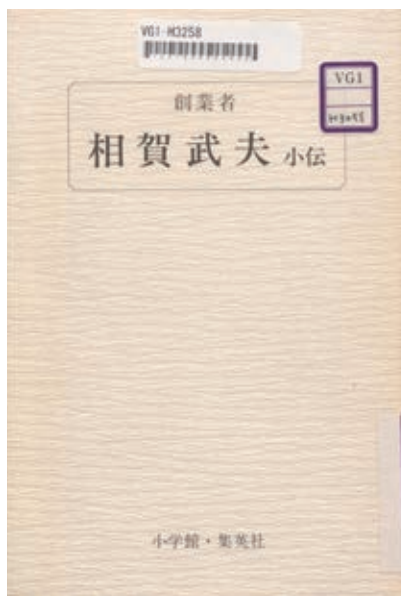
『創業二十周年を迎えて』金芳堂、1969
<VG1-H516>
昭和23年に創業した医学書の出版社、金芳堂が創業20周年に際してまとめたものです。わずか10ページほどの小冊子ですが、20年の間に金芳堂が出版した本のリストが付いています。

出版人の伝記・追悼録



私家版として発行され、関係者のみ配布された出版人の伝記（特に小伝）や追悼録が布川文庫には多く含まれています。

『小酒井五一郎追悼録』研究社，1963 < VG1-H457 > の表紙（左）と奥付（右）
研究社の創業者・小酒井五一郎（1881-1962）の追悼録です。奥付に非売品とあります。
なお、小酒井も布川と同じ新潟の長岡出身でした。



小学館社史編纂委員会 編『創業者相賀武夫小伝』小学館，1987 < VG1-H3258 > の表紙（左）と奥付（右）
小学館及び集英社の創業者である相賀武夫（のちに相賀祥宏と改名）の小伝です。奥付に非売品とあります。

献呈本

布川文庫には、布川と交流のあった人物からの献呈本も多数含まれています。

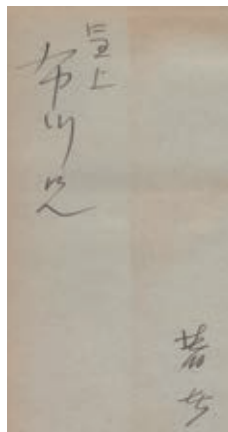
のがみ とよいちろう
野上 豊一郎 (1883-1950)

英文学者、能楽研究者。明治41年、東京帝国大学英文科卒業。翌明治42年法政大学講師となり、昭和21年に同大学学長、翌昭和22年総長。代表作に『能 研究と発見』『能の再生』など。

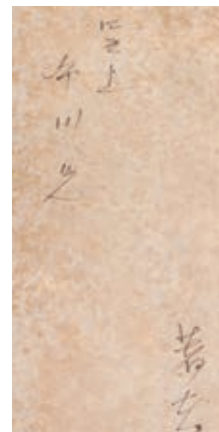
二人の出会いは、布川が法政大学の予科時代に野上の英語の講義を受けたところから始まります。その縁で布川は野上の子息の家庭教師を務めることになりました。布川の岩波書店入社後も、著者と編集者として、またそれ以上の関係として、家族ぐるみでの付き合いが続きます。布川文庫には、豊一郎の妻・弥生子からの献呈本も含まれています。



『バーナード・ショー』東京堂, 1949 <VG1-H6035>
アイルランド出身の劇作家であるバーナード・ショーの評伝です。法政大学と九州帝国大学で野上が行った講義が基になっています。見返しに「呈上布川兄 著者」とあります。



『シェバの女王』東京出版, 1942 <VG1-H3789>
日本では「シバの女王」と表記されることが多い旧約聖書に登場する女王についてまとめた表題作「シェバの女王」のほか、旧約聖書や新約聖書に登場する人物を描いた作品です。見返しに「呈上布川兄 著者」とあります。



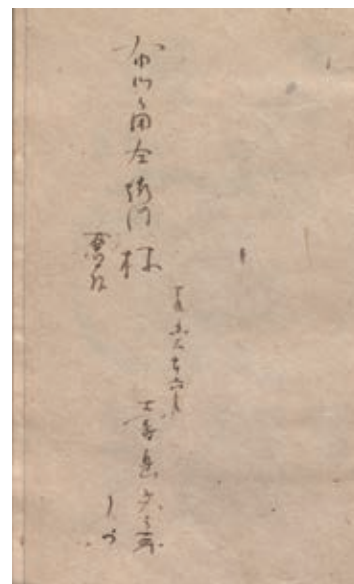
じゅがく ぶんしやう
壽岳 文章 (1900-1992)

英文学者、書誌学者。昭和2年京都帝国大学文学部選科修了。主著に『キルヤム・ブレイク書誌』『書物の世界』など。

布川が岩波書店の編集者だった頃に知り合います。『出版事典』（出版ニュース社 1971年）の編集（布川が編集委員長で、壽岳は編集委員の一人）を共に行うなど、布川の岩波書店退社後も職業上の交流が続きました。

また、布川が編集した自著『書物とともに』の中で、壽岳は布川のことを「多年にわたる人生と書物の盟友」と表現しています。（壽岳文章 著、布川角左衛門 編『書物とともに』（富山房百科文庫）富山房, 1980, p.325 <https://dl.ndl.go.jp/pid/12235654/1/170>）

なお、布川文庫からは、壽岳の妻・静子（筆名・しづ）や娘・章子からの献呈本も見つかっています。



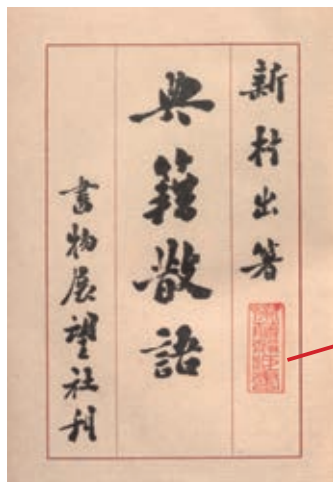
壽岳文章、壽岳静子『紙渡村旅日記』明治書房, 1945 <VG1-H19>
壽岳文章・静子夫妻が全国の紙渡村（紙渡きを行う集落）を旅したときの記録。「布川角左衛門様 恵存 一九五三年六月 壽岳文章 しづ」とあります。

蔵書印

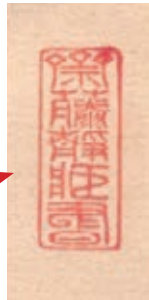
書物の所有者が自身の蔵書に押す印章のことを蔵書印といいます。東洋で発達した文化で、日本では中国の影響を受け古くから用いられてきました。

蔵書印の主な目的は所有者を明確にして書籍の散逸を防ぐことですが、特に個人蔵書の場合は、デザイン性の高いこだわりの蔵書印を用いるなど趣味的な意味合いを持つこともあります。

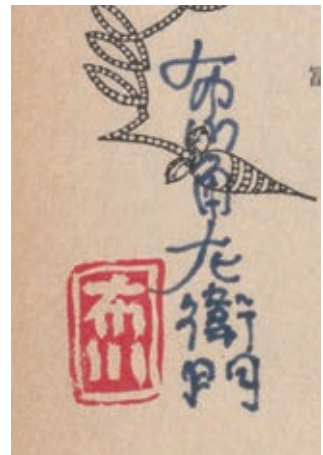
布川文庫には、布川の蔵書印が押された資料に加えて、別の人物や機関による蔵書印が押されている資料も存在します。「布川」印以外の蔵書印が押されている資料には、本の裏見返し部分に古書店の書店票が貼ってあるか、古書店の値札（たすき）が挟まっていることが多いため、これらは恐らく布川が古書店などで買い求めたものと思われます。



「斎藤静蔵書」
英語学者の斎藤静（1891-1970）の蔵書印である可能性があります。
新村出『典籍散語』書物展望社，1934 <VG1-H74>



布川の蔵書印 その1
M.イリーン『書物』弘文社，
1934 <VG1-H2>



布川の蔵書印 その2
寿岳文章 著，布川角左衛門 編『書物
とともに』（富山房百科文庫）富山房，
1980 <VG1-H836>



「門口蔵書」
詳細は不明ですが、「部門」や「番号」、「購入年月日」といった欄があり、この蔵書印の主が几帳面に蔵書を管理していたことがうかがえます。
内田魯庵『書齋文化』桑名文星堂，
1942 <VG1-H78>

参考文献

■ 全体

日本出版学会「布川角左衛門事典」編集委員会 編『布川角左衛門事典』「布川角左衛門事典」刊行会，1998 <UE11-G14>

小林恒也『出版のこころ：布川角左衛門の遺業』展望社，2011 <GK98-J41>

柴野京子「出版資料としての布川文庫（国立国会図書館人文総合情報室「布川文庫」）」『参考書誌研究』78号，2016，pp.169-178
<https://dl.ndl.go.jp/pid/10958310>

■ 布川文庫の来歴

大久保久雄「『布川文庫』について—近代出版研究資料の宝庫—」『印刷界』240号，1973.11，pp.46-48 <Z17-464>

布川角左衛門「身辺雑記—私の書庫—」『丸善ライブラリーニュース』103号，1976，p.1 <Z21-128>

布川角左衛門「『布川文庫』のこと」『日本古書通信』50巻5号，1985.5，pp.4-5 <Z21-160>

布川角左衛門「布川文庫の始末記」『国立国会図書館月報』324号，1988.3，pp.22-25 <Z21-146>

「特別コレクション「布川文庫」について」『国立国会図書館月報』521号，2004.8，p.18 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1001784>

■ 『日本出版百年史年表』編集関係資料

「近代出版文化の集大成『日本出版百年史年表』編集委員に聞く座談会」『出版ニュース』776号，1968.10，pp.6-11 <Z21-164>

布川角左衛門「『出版百年史年表』編纂うらばなし」『日本古書通信』33巻12号，1968，pp.2-3 <Z21-160>

長尾宗典「『日本出版百年史年表』と布川文庫」『メディア史研究』50号，2021，pp.25-32 <Z21-B110>

■ 『岩波書店五十年』編集関係資料

藤森善貢「『岩波書店五十年』『本をつくる者の心 造本40年』日本エディタースクール出版部，1986，pp.111-121
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12274535/1/62>

藤森善貢「『岩波書店五十年』について」『図書』171号，1963.11，pp.12-13 <Z21-184>

■ 出版社史、出版人の伝記・追悼録

出口一雄「出版社史 既刊書と解説」『日本古書通信』33巻2号，1968，pp.3-6 <Z21-160>

大久保久雄「書店・出版社の社史と伝記」『出版研究』8号，1977，pp.167-184 <Z21-279>

鈴木宏宗「饅頭本（追悼録・遺稿集など）という名称の成立と特色と」『近代出版研究』3号，2024，pp.190-202 <Z72-V983>

■ 献呈本

布川角左衛門「野上夫人とその周辺」『日本名作自選文学館 別冊』1972，pp.43-52 <https://dl.ndl.go.jp/pid/12504193/1/26>

布川角左衛門「野上さん一家と私のこと」『野上弥生子全集』月報 第2期 27号，1991.4，pp.4-8 <Y91-E409>

■ 蔵書印

小野則秋『日本の蔵書印』臨川書店，1977
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12235975>

井上宗雄ほか 編『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店，1999 <UM2-G2>
「蔵書印の世界」<https://www.ndl.go.jp/zoshoin/>

※ URL の最終アクセス日：2026年1月27日

明治時代の 「わが家のカレー」、 そのお味は？

鈴木 加成太



図1 食卓を囲む家族
福田琴月『衛生と衣食住』博文館，明治44（1911）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/849227/1/5>（モノクロ画像）

一度にたくさん作れて、簡単においしくできて、栄養もしっかり取れる。カレーライスは、忙しい毎日を過ごす人たちの強い味方です。筆者も、これまでカレーライスにはさまざまな場面で助けられました。

現代の自宅で作るカレーは、お肉、玉ねぎ、人参、じゃがいも、カレールーの組み合わせが定番です。それでは、昔の家庭ではどのようなカレーが作られていたのでしょうか。

ここでは、都市部で一般の人々がカレーライスを食べるようになったころの様子と、家庭でカレーが作られるはじめた当時のカレーのレシピを、当館が所蔵する図書や雑誌から紹介します。

西洋料理としての紹介と導入

カレーのレシピが掲載された日本の料理書は、明治5（1872）年に刊行された『西洋料理指南』^①と『西洋料理通』^②までさかのぼることができるとされています^③。この2冊はどちらもイギリスの料理書を翻訳したもので、カレーは西洋料理の一つとして日本に紹介されたのでした。ただし、明治初頭の時点での西洋料



図2 西洋料理の会食の様子

吉田香雨（伊太郎）編『西洋日本支那礼式食法大全』東京屋〔ほか〕、明治19（1886）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/759215/1/4>（モノクロ画像）

理は、高級官僚や実業家といったごく一部の階層に、外食や晴れがましい席での食事として受容されており、まだ一般には受け入れられていなかったようです。

その後、カレーライスは「ライスカレー」として学校や都市での生活に導入されていきます。たとえば、明治14（1881）年末ごろの札幌農学校の寄宿舎の献立や、明治19（1886）年ごろの尋常師範学校の寄宿舎のものとされる献立には「ライスカレー」の文字が見えます。また、明治23（1890）年に刊行された落語の速記本『かり枕』の中では、東京・下谷の洋食店で、二人連れの書生が料理を選びながら「僕はソップは入らん。シチューとビステキとライスカレーがあれば沢山だ」、「僕はコロケイが食度」などと会話する様子が描かれています。

「ライスカレー」の不評と失敗談

しかし、カレーの人気は、当初は必ずしも高くなかったようです。

明治22（1889）年に刊行されたタマネギの栽培書『球葱一斑』の中では、「ライスカレー」は「猫飯に類すると邦人

に好まれざる」と書かれています。明治31（1898）年9月24日付けの風刺雑誌『團圓珍聞』に掲載された川柳には、「ライスカレー汚い飯と下女覚え」とも。ご飯の上に汁物をかける印象の悪さや見た目の悪さがネックになっていたことがうかがえます。

また、カレーがあまり知られていなかったころにはいろいろな失敗もあったようで、1900年代の資料からは次のような川柳も見いだせます。

ライスカレーを肴屋で下女尋ね
米のライスカレークンナと半可通

ハイカラな主人は、下女（家政婦）に「今日はライスカレーを作ってくれんかね」と頼んだのでしょうか。しかし、カレーを知らなかった彼女は魚のカレイの一種と思ったのか、鮮魚店に行って「あのおう、ライスカレイはあるでしょうか……」。また、ある西洋料理店にやって来た通気取りの客が、自信たっぷりに注文したのは「米のライスカレー」。「ライス」がお米の意味だと知らなかったと見えます。

図4 オルガンを弾く女性
天谷秀『おるがん独習の友』十字屋楽器店、明治41（1908）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/854745/1/1>（モノクロ画像）



図3 横山運平
報知新聞社出版部 編『世界のキネマスター』報知新聞社出版部、大正14（1925）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1903563/1/147>

「ライスカレー」好きの人々

そのような中でも、カレーが少しずつファンを増やしていった様子もうかがえます。

明治後期から昭和期にかけて活躍した俳優の横山運平（図3）は「ライスカレーが大の好物」だったようで、「何日ぞや友人と競走し八枚も一時にペロリと平らげ第一等賞を得た」というエピソードが、明治42（1909）年刊行の俳優名鑑の中で紹介されています。

また、女性の投稿を主とする文芸雑誌『女子文壇』の明治40（1907）年1月号に掲載された短文「大好物」には、「私の大好きなものは、女子文壇とそれにお琴とバイオリンと、オルガンと、薩摩琵琶と、手風琴と、テニスと、ブランコと、国語と歴史と、ハイネの詩集と、そしてライスカレーとである」とあり、女学生の心弾むような生活の中にカレーライスが溶け込んでいたことがうかがえます。

ベストセラーの中の

カレーのレシピ

村井弦斎（図5）の「食道楽」は、明治36（1903）年に『報知新聞』紙

上で連載され、単行本化もされて大評判となった料理小説です。和・洋・中の料理に精通して家庭での実践を試みる中川兄妹と、その妹・お登和に思いを寄せる青年・大原を主役に据え、料理や食に関する実用的な知識を織り込んだ物語が展開されました。中でも人々の関心を集めたのが、作中で料理自慢のお登和が振る舞ったり作り方を教えたりする料理とそのレシピでした（図6）。

物語に登場する630種もの料理のレシピの中には、カレーのレシピも含まれており、家庭向きの「南京豆入りカレー」⁽¹⁵⁾、本格志向の「印度風のライスカレー」⁽¹⁶⁾などが登場します。

「食道楽」が連載された1900年代は、産業の発展に伴い、小家族で都市に住む給与所得者層が生まれ、夫が外で働き、妻が家事を担うという家庭スタイルが日本で形成されていった時期に当たります。そして、こうした社会変化の中で、中流以上の家庭の女性にとって、それまでは軽視されていた料理を作る技能が次第に重要なものと認識されるようになっていったようです。「食道楽」が多くの人々に歓迎されたのも、一つにはこうし



図6 お登和が料理を教えている様子
村井弦斎『食道楽』夏の巻、報知社、明治36（1903）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/886114/1/54>（モノクロ画像）



図5 村井弦斎
村井弦斎『食道楽』続編 春の巻、報知社、明治39（1906）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/886117/1/3>（モノクロ画像）



図7 赤堀割烹教場の様子
赤堀峯吉『和洋家庭料理法』自省堂, 明治37(1904) <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/849179/1/6> (モノクロ画像)

た背景があつたためと考えられていま⁽¹⁾す。

家庭でのカレー作り

1900年代の資料には、実際に家庭でカレーを作っていた記録も見られるようになりま⁽¹⁾す。

たとえば、雑誌『新仏教』明治36(1903)年6月号に掲載されたある女性の料理日記には、食卓に「ライスカレー」が運ばれてくる様子が描かれています。⁽¹⁾また、雑誌『女子文壇』の明治41(1908)年5月号に投稿された短文では、かつて「お勝手ごととは嫌ひも嫌ひ蛇よりも嫌ひ」⁽²⁾だった投稿主が、料理の稽古をさせられ、このごろでは自発的に「ライスカレー」などを作るようになったと書いています。

この時期から盛んに刊行されるようになった家庭向けの料理書にも、さまざまにカレーのレシピが掲載されています。

明治38(1905)年に刊行された『家庭料理法 和洋折衷』⁽²⁾は、日本で最初の料理学校・赤堀割烹教場(図7)でも教えられていたという「和洋折衷料理」の作り方をまとめたものです。ここでのカ

レーのレシピの特徴は、カレー粉を使わず、からしや胡椒の組み合わせで作れるようになってきていること。身近な材料でカレーを再現しようとする創意工夫に驚かされます。

明治43(1910)年に刊行された『西洋料理教科書』⁽²⁾は、女子教育者の桜井ちか子(図8)が編んだ料理書です。アメリカに遊学した経験を持つ桜井は、西洋家庭料理や西洋の知見を取り入れた台所の普及に務めました(桜井自身の台所の



図8 桜井ちか子
桜井ちか子『実用和洋惣菜料理』実業之日本社, 大正元(1912)
<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/946167/1/5> (モノクロ画像)



図9 桜井ちか子の台所の様子

桜井ちか子『実用和洋惣菜料理』実業之日本社, 大正元(1912) <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/946167/1/6> (モノクロ画像)

様子は図9)。ここでの「ライスカレー」のレシピの特徴は、玉ねぎ・人参・じゃがいもという現代のカレーでも定番の3具材がそろっていることです。明治期に本格的な栽培が始まったこれらの野菜は、徐々に普及し、明治の終わりごろにはカレーの具材として勢ぞろいするようになったとされています。^{2,3}このレシピも、定番の3具材がそろった最初期のレシピといえそうです。

同年に刊行された『北海道魚菜応用家庭料理』²⁴は、札幌区立女子職業学校(図10)の割烹料の講師であった大久保岩三郎による料理書です。北海道の食材に重点を置いたところが特徴で、ここに掲載されている「蟹ライスカレー」は、具材に蟹とねぎを使い、カレー粉のほかに出汁、醤油、塩、みりんを加える、独特なレシピとなっています。その土地ならではの食材を用いているという点で、ご当地カレーの先駆けといえるかもしれません。

このほか、カレーが日本に普及してきたきっかけとして、地方の青年が軍隊でカレーの作り方を覚え、それを地方で広めたとする説があります。^{2,5}明治43



図10 札幌区立女子職業学校での実習の様子

自彊舎編『北海道魚菜応用家庭和洋料理』維新堂, 明治45(1912)

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/849141/1/5> (モノクロ画像)

(1910)年に発行され、陸軍での炊飯調理法を示した『軍隊料理法』²⁶には、「カレー、ライス(カレー汁掛飯)」のレシピが掲載されています。具材は玉ねぎと肉だけというシンプルなものですが、このカレーが地方の食卓に伝わっていった可能性もあります。

実際に人々の間にカレーライスが浸透したのはもう少し先のことでされています²⁷が、家庭でカレーが作られるはじけたころの料理書に掲載されたレシピには、西



図11 軍隊の炊事場の様子

『近衛歩兵第三聯隊写真帖』中村義一, 大正3(1914)

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/941794/1/101> (モノクロ画像)

洋料理としてのカレーに親しむためのさまざまな工夫が見られます。その背景には、カレーライスのおいしさはもちろんのこと、カレー粉さえあれば作れる手軽さや、大胆にアレンジしても成立するカレーならではの包容力もあったことでしょう。

そんなカレーの魅力は、百年以上が経った今もなお健在。自作のカレーを口に運ぶとき、明治の時代から受け継がれてきたカレーへの愛と親しさも、私たちの舌を刺激しているのかもしれない。



図 12 料理をする女性

(左) 坂本隆哉『衛生食物調理法』博文館, 明治 37 (1904) <https://dl.ndl.go.jp/pid/848978/1/4> (モノクロ画像)

(右) 石井泰次『四季料理』博文館, 明治 40 (1907) <https://dl.ndl.go.jp/pid/849039/1/2> (モノクロ画像)

- 1 敬学堂主人『西洋料理指南』雁金書屋, 1872 <特 54-156 >
- 2 仮名垣魯文 編ほか『西洋料理通』万笈閣, 1872 < 209-27 >
- 3 小菅桂子『カレーライス誕生』講談社, 2013, pp.55-56 < GD51-L11 >
- 4 カタジーナ・チフィエルトカ「近代日本の食文化における「西洋」の受容」(芳賀登・石川寛子 監修『全集日本の食文化』第 8 巻 (異文化との接触と受容), 雄山閣出版, 1997) < GD51-G27 >
- 5 北海道大学 編『北大百年史』通説, ぎょうせい, 1982 <https://dl.ndl.go.jp/pid/12114679/1/54>
- 6 『島根県私立教育会雑誌』21 号, 1886.10 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1600552/1/7>
- 7 落語会 編ほか『かり枕』イーグル書房, 1890 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/891225/1/96>
- 8 斎藤祥三郎『球葱一斑』敬業社, 1889 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/840218/1/22>
- 9 『團圓珍聞』1182 号, 1898.9.24 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/11210701/1/12>
- 10 『團圓珍聞』1253 号, 1900.2.3 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/11210774/1/11>
- 11 佐伯法雲 編『正義の旗風』五明社, 1905 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/758347/1/16>
- 12 杉浦善三 編『俳優明鑑』演芸倶楽部, 1909 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/858404/1/71>
- 13 『女子文壇』3 巻 1 号, 1907.1 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/11186189/1/77>
- 14 明治36 (1903) 年の1月から12月まで連載。『報知新聞』< YB-18 >
- 15 村井弦斎『食道楽』夏の巻, 報知社, 1903 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/886114/1/40>
- 16 村井弦斎『食道楽』秋の巻, 報知社, 1903 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/886115/1/73>
- 17 江原絢子・東四柳祥子『近代料理書の世界』ドメス出版, 2008, p.14, p.20 < GB1-J4 >
- 18 黒岩比佐子『『食道楽』の人村井弦斎』岩波書店, 2004, p.8 < KG574-H57 >
- 19 『新仏教』4 巻 6 号, 新仏教徒同志会, 1903.6 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/10986800/1/40>
- 20 『女子文壇』4 巻 7 号, 女子文壇社, 1908.5 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/11186211/1/83>
- 21 赤堀峰吉ほか『家庭料理法 和洋折衷』杉本翰香堂, 1905 <https://dl.ndl.go.jp/pid/849004>
- 22 桜井ちか子 編『西洋料理教科書』紫明社, 1910 <https://dl.ndl.go.jp/pid/849071>
- 23 注 3 前掲書 pp.84-98
- 24 大久保岩三郎『北海道魚菜応用家庭料理』富貴堂, 1910 <https://dl.ndl.go.jp/pid/849140>
- 25 注 3 前掲書 pp.191-194
- 26 『軍隊料理法』川流堂, 1910 <https://dl.ndl.go.jp/pid/849015>
- 27 注 3 前掲書 p.98

※< >内は当館請求記号。

実際に作ってみました!

1

南京豆入のカレー

村井弦斎『食道楽』夏の巻, 報知社, 明治 36 (1903)



▲レシピから再現したカレー

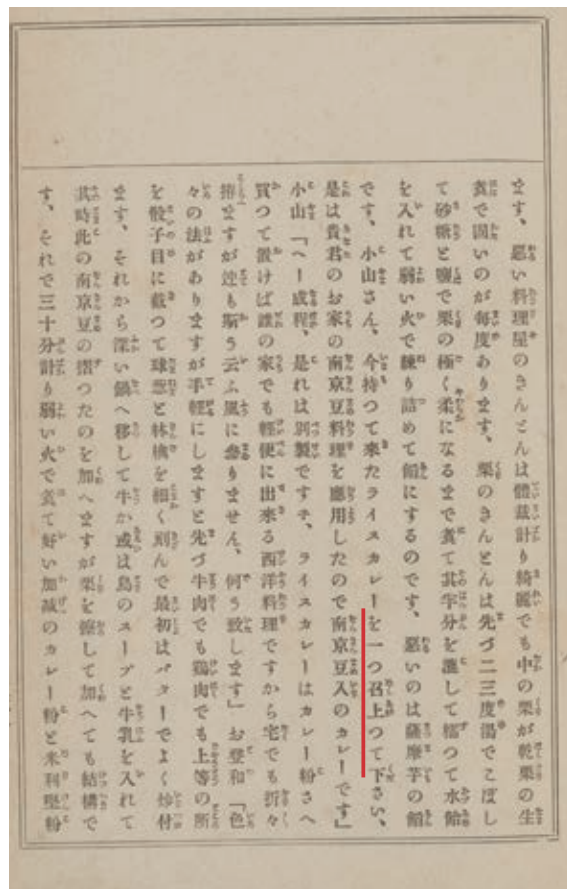
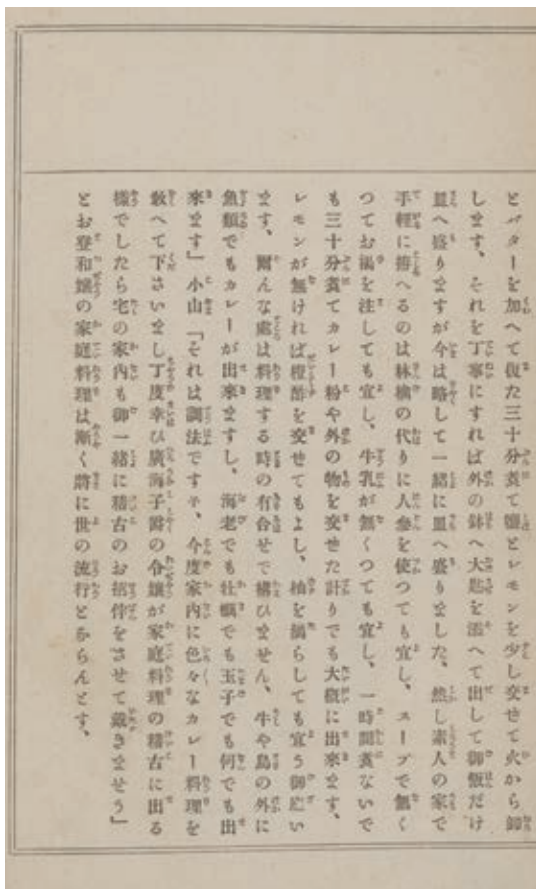
◆具材

肉 (魚などでも可)・玉ねぎ・りんご (人参でも可)・南京豆 (落花生のこと。なければ栗でも可)

◆調味料など

バター・牛または鳥のスープ (あれば)・牛乳 (あれば)・カレー粉・小麦粉・塩・レモン (なければ柚子などでも可)

牛乳を入れたことで爽やかな色合いに。すりおろした落花生がコクとキャッチーな味わいを生んでいます。玉ねぎとりんごの自然な甘み、カレー粉とレモン果汁のスパイシーさをバランスよく楽しめます。



▲「南京豆入のカレー」 pp.61-62 料理の得意なお登和が、主人公・大原の友人の小山に家庭向けのカレーの作り方を教えている場面。『食道楽』ではこうした登場人物同士の会話を通じて多彩なレシピが紹介される。

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/886114/1/40>

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/886114/1/41>

本文中で紹介した明治時代の料理書から、特徴的なカレーを再現しました。一部、分量をアレンジしています。

2

鯖のライスカレー

赤堀峰吉ほか『家庭料理法 和洋折衷』杉本翰香堂，明治 38（1905）

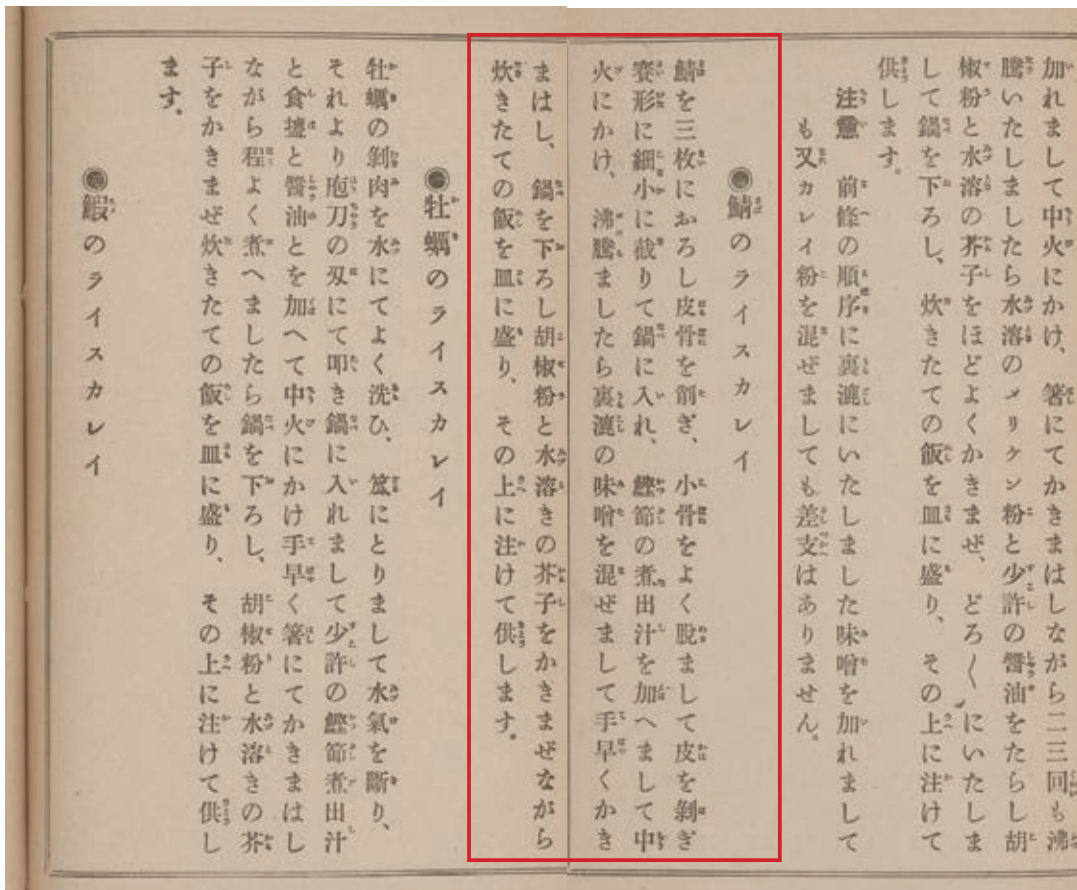


◆具材
鯖

◆調味料など
かつお節だし・味噌・胡椒・からし

鯖は缶詰を使用しました。からしの爽やかな辛さが鯖ととてもよく合っています。ジャンキーながら凛とした味わいは胡椒によるものか。お茶漬け風ですが、カレーのような色合いもあり、カレーとしても十分楽しめます。

▲レシピから再現したカレー



▲「鯖のライスカレー」 pp.111-112
<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/849004/1/63>
<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/849004/1/64>

3

ライスカレー

桜井ちか子 編『西洋料理教科書』紫明社, 明治 43 (1910)



▲レシピから再現したカレー

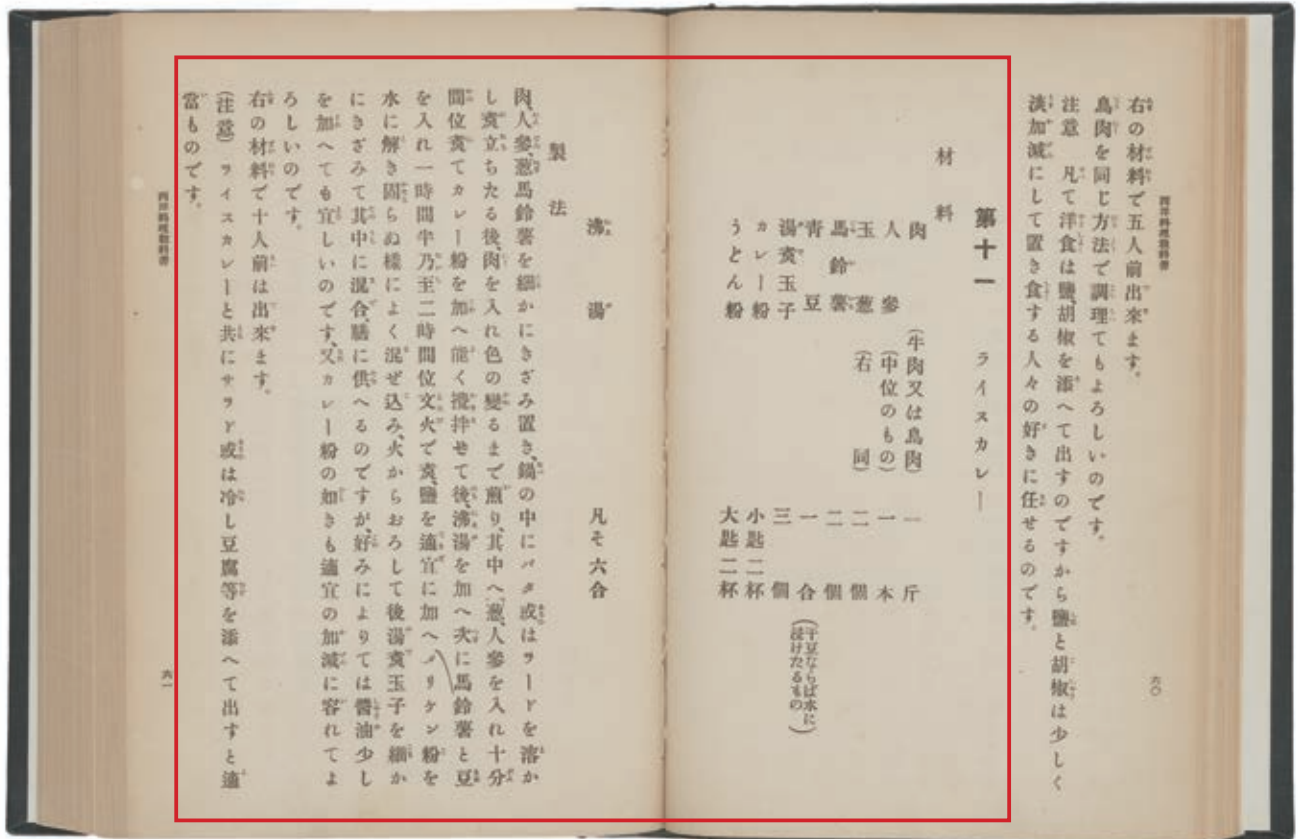
◆具材

肉 (牛肉または鶏肉)・人参・玉ねぎ・じゃがいも・青豆・ゆで卵

◆調味料など

カレー粉・小麦粉・バターまたはラード・醤油 (お好みで)

刻んで入れたゆで卵とじゃがいものやさしい味わいが特徴です。スパイスの刺激が和らぐことで、親しみやすい味に仕上がりました。毎日でも食べたいおいしさ。



▲「ライスカレー」 pp.60-61
<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/849071/1/53>

4

蟹ライスカレー

大久保岩三郎『北海道魚菜応用家庭料理』富貴堂，明治 43（1910）

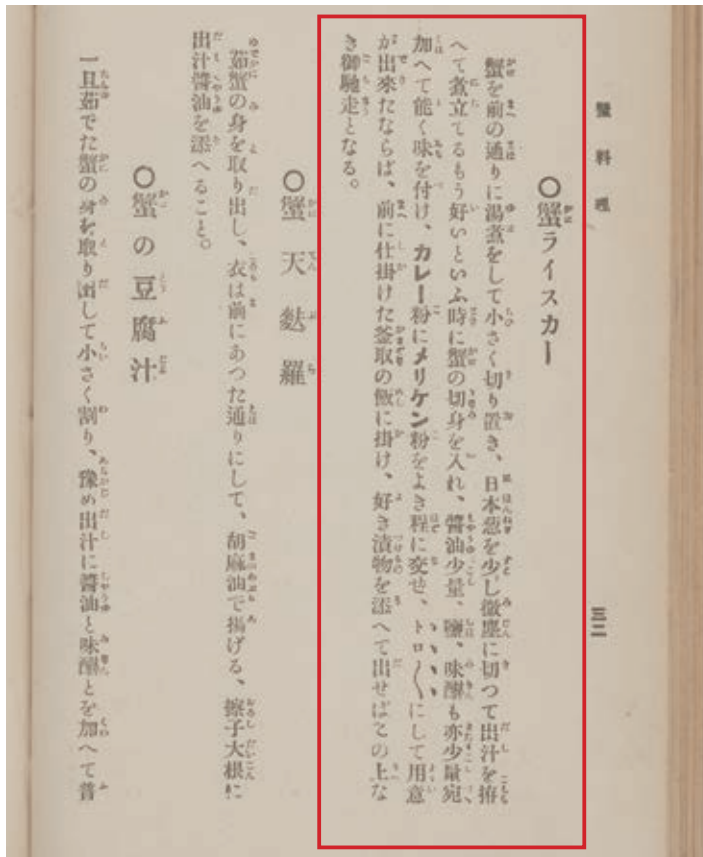


◆具材
蟹・ねぎ

◆調味料など
だし汁・醤油・塩・みりん・カレー粉・小麦粉

甘みがあり、さっぱりとした味わいです。蟹の味はカレーに溶け込んでしまってあまり分かりませんでした。このあとカレーうどんにリメイクしたのですが、カレーうどんの方が合っているように感じました。

▲レシピから再現したカレー



▲「蟹ライスカレー」 p.32

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/849141/1/31>

※レシピ画像は再版(自彊舎 編『北海道魚菜応用家庭和洋料理』維新堂，明治 45（1912））のものです。

5

カレー、ライス（カレー汁掛飯）

『軍隊料理法』川流堂，明 43（1910）



▲レシピから再現したカレー

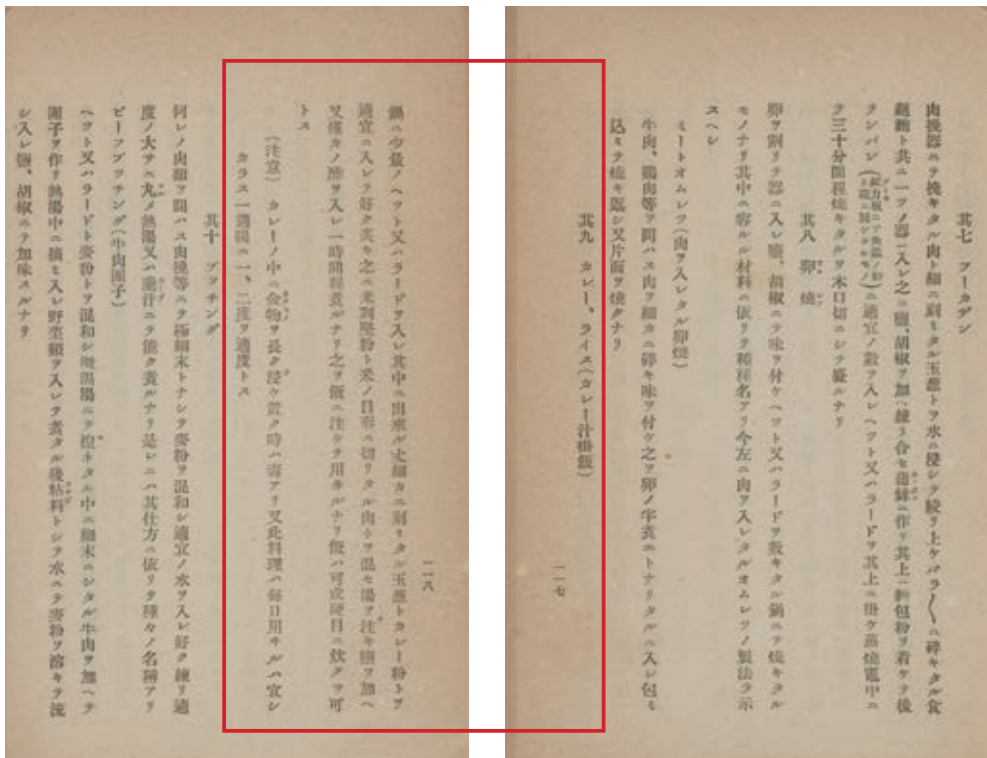
◆具材

玉ねぎ・肉

◆調味料など

牛脂またはラード・カレー粉・小麦粉・塩・酢

失敗する可能性をも極限までそぎ落としたかのようなシンプルなカレー。具材を小さく切っているので、あまり噛まなくても食べられます。酢の爽やかさもうっすらと感じます。



▲「カレー、ライス（カレー汁掛飯）」 pp.117-118

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/849015/1/69>

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/849015/1/70>

つながりを 強めるために



支部図書館長が集まって会議が行われた時の様子。
活発な意見交換が行われました。



府省庁や最高裁判所に、国立国会図書館の支部図書館があることをご存知ですか。

支部図書館は、各機関の職員に所蔵資料を提供するだけでなく、国立国会図書館や他の支部図書館の利用を仲介し、各機関の出版物を国立国会図書館に納本する役割も担っています。国立国会図書館は、支部図書館を通じて府省庁などの職員に図書館サービスを提供するとともに、会議や研修を通して情報提供を行っています。

支部図書館と日々やり取りをする中で、「書庫が資料でいっぱいになりそうだが、どのように処分すればよいか」、「図書館用に作られた建物ではないので、所蔵環境をどのように管理すればよいか」といったご相談をいただきます。館内の有識者に相談してできる限りお答えするようにしていますが、当館の資料は原則として永久保存することになっており、建物も保存に適した環境になるよう設計されているため、経験に基づいたアドバイスをすることが難しい場合があります。従来、会議等や広報誌で各館の取組みを紹介いただいてきましたが、条件の近い支部図書館同士で相談し、

情報を共有いただくと、より有効なアドバイスを得られるのではと感じることもありました。

コロナ禍前は忘年会等で親睦を深めたり、さらに昔は全国の公共図書館や議会図書室を訪問して意見交換を行ったり、休日にハイキングをしたりと、活発な交流がありました。最近では、会議や研修がオンライン中心となり、参加しやすくなったという声がある一方で、顔見知りになれる機会が減り、気軽に相談できる関係を築くことが難しい状況になっていたかもしれません。

そこで、久しぶりに支部図書館の皆様にお越しいただき、対面での会議を行いました。お互いに移動や準備の時間は増えますが、オンラインの時にはなかなか発言が出づらかったところ対面では活発な意見交換が行われ、会議後には各館の困りごとについて直接情報交換を行う動きが生まれま

した。
今後も、支部図書館同士が協力しあえる関係を築けるよう、積極的に機会を設けていきたいと考えています。

(支部図書館・協力課 支部島民)

本屋に

ない本



『愛・地球博回顧録 2005年
日本国際博覧会』改訂版
中村利雄著、地球産業文化研究所刊
2020.10
212 p ; 19cm

2025年に開催された大阪・関西万博は盛況のうちに終幕した。遡ると20年前、2005年に開催された愛知万博（愛・地球博）を皆さんは覚えていらっしゃるか。本書は、2005年日本国際博覧会協会（博覧会協会）事務総長として、愛・地球博会期中の実務を取り仕切った著者による回顧録である。

万博の企画運営と聞くだけで、準備段階から会期中まで数多くの困難を伴うことが容易に想像できる。しかし、本書を読むと想定外の苦労もまた多かったことが分かる。例えば、日本開催の万博でも国内関係者だけで勝手に内容を定めることはできず、万博を監督する国際機関である博覧会国際事務局（BIE）の運営委員会における審

議が必要となる。愛・地球博の運営委員会では「毎回、毎回、思わぬ問題も含めてあらゆる問題を提起され、時には立ち往生し吊るし上げに遭うこと」があったと著者は記している。さらに、博覧会協会は万博全体の運営だけでなく、多くの自主事業を行っていた。例えば、愛・地球博の目玉と言われた氷漬のマンモスの展示も博覧会協会が企画した事業だった。本書には、氷漬

のマンモスが発見されたロシア北部・サハ共和国に著者自らが出向き、万博における展示のための交渉をする様子が綴られている。本書では、以上のように多くの困難があった愛・地球博の企画運営にあり、どのように問題の所在や状況を認識し、解決の道を探ったのが当事者

の言葉で述べられている。1990年代後半は万博が曲がり角を迎えた時代であり、20世紀最後の万博として2000年に開催されたドイツ・ハノーヴァー万博は巨額の赤字を残す結果となってしまった。もし愛・地球博が失敗するようなことがあれば万博の存続の岐路に立たされることになる。この認識があったと著者は記している。

プレッシャーも大きかったであろう。そのような状況下、著者率いる博覧会協会は国内外の万博関係者に対して、一般来場者に対しても、日々発生する問題に真摯に対応することで信頼を得ていき、閉幕時にはお礼や労いの言葉が多く寄せられたという。博覧会協会の奮闘の詳細は、ぜひ本書を読んで確かめてほしい。

なお、愛・地球博閉幕後、デジタル化された愛・地球博関係資料が国立国会図書館に寄贈され、国立国会図書館デジタルコレクションに「他機関デジタル化資料」として収録されている。本書を含む書籍類はログインなしで閲覧可能であり、パブリオンやイベントの動画は館内限定で閲覧可能である。また、愛・地球博の瀬戸会場跡地はあいち海上の森センター、長久手会場跡地は愛・地球博記念公園として整備されている。いずれも愛・地球博のテーマ「自然の叡智」を体現する自然豊かなスポットとなっているので、名古屋方面に出かけた際に訪ねてみてはいかがだろうか。

（倉家 洋介）

※本書は国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能です。

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

NDL Topics

連続講演「DX時代の図書館と児童ヤングアダルトサービス」更新（動画配信）

令和3年11月から国立国会図書館公式YouTubeチャンネルで配信している連続講演「DX時代の図書館と児童ヤングアダルトサービス」のうち、「GIGAスクール時代に学校図書館は何かできるか」及び「デジタル化で進める読書のバリアフリー―児童サービスの現場にできること」の内容を更新し、新たに配信しました。

○演題・講師

「これからの学校図書館―学校図書館を学ぶの核拠点へ―」有山裕美子氏（滋賀文教短期大学准教授）
「読書バリアフリーにデジタルを活かす―児童サービスの現場にできること―」野口武悟氏（専修大学文学部教授）

○配信日程 令和8年3月24日（火）から

○視聴方法 国際子ども図書館ホームページの左記のページからご視聴ください。

連続講演「DX時代の図書館と児童ヤングアダルトサービス」

<https://www.kodomo.go.jp/event/special/lecture>



○問合せ先 国際子ども図書館企画協力課 協力係

電話 03(3827)2053（代表）



資料のデジタル化に伴う原資料の利用休止について

国立国会図書館では、所蔵資料の保存と利用の両立を図るためデジタル化による媒体変換を行い、作業が終了した後は、原資料に代えてデジタル化資料を提供しています。このデジタル化作業のため、次のとおり一部の資料の利用を休止します。

○対象資料 東京本館所蔵の雑誌 約70万冊

○利用休止予定期間

令和8年4月1日から令和9年12月31日まで

※ご利用いただけない資料は、国立国会図書館サーチの書誌詳細画面の「国立国会図書館の所蔵で」「作業中 デジタル化のため」の表示でお知らせしています。ご利用にあたっては、事前に検索してご確認ください。

※詳細については当館ホームページ「デジタル化作業に伴う原資料の利用休止について」(<https://www.ndl.go.jp/preservation/digitization/unavailable/>)に掲載しております。



ご不便をおかけしますが、国民の文化的資産を後世に伝えるため、ご理解とご協力をお願いいたします。

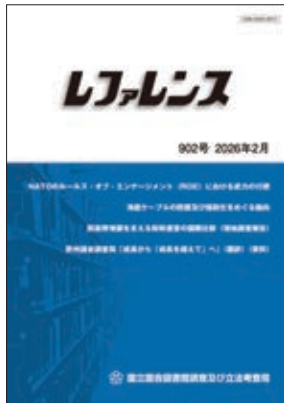
NDL Topics

新刊案内

レファレンス 902号

NATOのルールズ・オブ・エンゲージメント（ROE）における武力の行使
 海底ケーブルの防護及び強靱化をめぐる動向
 防衛費増額を支える財政運営の国際比較―米国、英国、ドイツ、EUの計画と財政ルール―（現地調査報告）

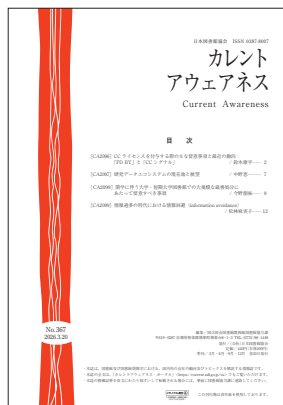
欧州議会調査局「成長から「成長を超えて」へ」（翻訳）
 ―欧州における環境・社会に配慮した発展をめぐる議論―（資料）



A4 73頁 月刊 1,100円（税込）
 発売 日本図書館協会

カレントアウェアネス 367号

CCライセンスを付与する際の主な留意事項と「最近の動向」：「PD BY」と「CCシグナル」
 研究データエコシステムの現在地と「展望」
 閉学に伴う大学・短期大学図書館での大規模な蔵書処分にあたって留意すべき事項
 情報過多の時代における情報回避（information avoidance）



A4 16頁 季刊 440円（税込）
 発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
 電話 03(3523)0812



#44
 国際子ども図書館
 中庭の桜
 photo by Aki

4

NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 2 6 . 4

NO.780
APRIL
2026

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Nihongo no hokekyo: ENAMI Bunzo, a nearly forgotten literary figure; ABE Yoshishige, on the last day of World War II
- 04 National Diet Library Vision 2026-2030:
Co-create the Circulation of Knowledge
- 10 The Personal Libraries of Well-Known People (8)
Nunokawa collection
- 18 Strolling in the forest of books (31)
What did homemade curry taste like in the Meiji Era?
- 29 <Tidbits of information on NDL>
Strengthening connections with NDL branch libraries
- 30 <Books not commercially available>
Ai chikyuhaku kaikoroku: 2005nen nihon kokusai hakurankai (revised edition)
- 31 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和8年4月号 (No.780)

令和8年4月1日発行

発行所 国立国会図書館

編集者 田中智子

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
F A X 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を転載する場合（全文または長文にわたり抜粋する場合、または図版を転載する場合）には、
事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（<https://www.ndl.go.jp/>）>刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 2 6 . 4

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

士